

九二六号室のドアが開いた瞬間、僕は反射的に室内を見回した。

細いベッドが二台。中央に小さなテーブルが一つ。窓際には仕事用のデスクがあり、奥の壁にはユニットバスへ続くドアが見える。

「斉藤。いつまで入口にいるんだ」

背後から大城帆高に声をかけられ、慌てて中へ入った。帆高が僕のあとに続き、ドアを閉める。施錠される音が妙に大きく響いた。

帆高は営業本部、僕は企画部。同期で、明日の商談へ一緒に出席する。会社から宿泊案内が届いた時点で、同じツインルームを使うことは知らされていた。

男性社員二人なら相部屋でも問題ない。総務はそう判断したらしい。

僕にとっては、大問題だった。

(絶対に、気づかれないようにしないと……)

僕はカントボーイだ。見た目も戸籍上も男だが、脚のあいだに男性器はない。この体のことは、入社してから誰にも話していなかった。

一人部屋への変更も考えた。けれど理由を尋ねられれば、かえって不審に思われる。二泊ではなく一晩だけなのだから、着替えと入浴にさえ気をつければ隠し通せる。そう自分に言い聞かせて、相部屋を受け入れた。

よりによって相手が帆高なのは、運が悪いとしか言いようがない。

背が高く、体格がいい。クライアントの懐へ入るのがうまく、難しい案件ほど嬉しそうに引き受ける。誰に対しても愛想がよく、仕事も速い。欠点らしい欠点が見つからないところまで、僕には気に入らなかった。

それ以上に苦手なのは、帆高が人の変化へ異様に鋭いことだ。

「右、使えよ。斉藤は壁際の方が寝やすいだろ」

「どうして知ってるんだよ」

「研修の宿泊でそうしてた」

「何年前の話だと思ってるんだ」

「三年くらいなら覚えてる」

帆高は僕の返事を待たず、壁際のベッドへ僕の鞆を置いた。

新人研修のころからそうだった。僕が資料の数字を一つ間違えれば、誰より早く気づく。会議で言葉に詰まれば、頼んでもいないのに話を引き取る。体調が悪い日に限って声をかけてくる。

親切なのだとは思う。けれど自分だけがいつも観察されているようで、帆高のそばにいと落ち着かなかった。

「何をそんなに警戒してるんだ」

「し、してない」

「部屋に入ってから、ずっと風呂場ばかり見てる」

「……明日の準備を考えてただけ」

「へえ……」

帆高が口元だけで笑う。その目は僕の顔から首筋、胸元へと下がり、最後に腰のあたりで止まった。

服の上からわかるはずがない。それでも僕は、無意識にシャツの裾を引き下ろしていた。

「見るなよ」

「見られて困るものでもあるのか」

「そういう言い方が苦手なんだよ」

鞆からノートパソコンを取り出し、話を終わらせるようにデスクへ置いた。

「明日の最終確認をしよう。終わったら僕が先にシャワーを使う」

「別にいいけど、ずいぶん必死だな」

「朝が早いからだよ」

椅子は一脚しかない。僕がデスクの前へ座ると、帆高はすぐ隣のベッドへ腰掛け、長い脚を伸ばした。資料を示す指が近づくたびに肩へ体温が触れそうに

なる。

帆高と組むと仕事は早い。僕の説明を遮らず、必要なところだけ質問する。苦手な相手なのに呼吸が合ってしまうことが、また悔しかった。

「ここは斉藤が説明しろ。先方は企画意図を聞いたがってる」

「営業側で話した方が通りやすすくない？」

「俺が前に出るより、お前が話した方が伝わる。俺は横から補足する」

「……わかった」

確認が終わったころには、日付が変わりかけていた。

僕は着替えを抱えてユニットバスへ入り、内側から鍵をかける。念のため二度ノブを回し、開かないことを確認した。

（大丈夫。ここで全部着替えて出れば、何もわからない……）